

國指定史跡

沖永良部島



大形墓

Ancient Tombs on Okinoerabu Island

琉球の歴史

墓

風葬

石積

石積

石積

洗骨

掘大形墓

琉球

石灰岩

世之主の墓

和泊町

島主「永良部世之主」が眠る？ 王の陵墓？!

世之主の墓は地元では「ウファ」と呼ばれ、15世紀初頭頃に沖永良部島を治めていたとされる「永良部世之主」の墓と伝わります。その頃琉球では、北山・中山・南山の三つの勢力が、琉球を統一しようと競っていました。この島は沖縄島北部今帰仁城を拠点とする北山の領地で、北山王の次男真松千代(まちじょ)が治めていたと伝わります。島のあちこちには、世之主にまつわる史跡や伝承が数多く残され、今でも地域で大切に受け継がれています。

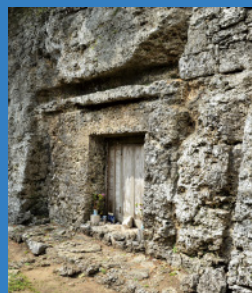


2つの庭と参道を持つ、 奄美群島最大の石造り掘込墓

世之主の墓は、まず琉球石灰岩の岩盤を掘り窪め広大な空間を造り、最北の岩壁に横穴を掘り込んで遺骨を納める墓室が設けられています。墓室の上には削り出した岩盤と石積みで垂直面がそそり立ち、更にその上には石垣を築いて被葬者の威厳を示すかのよう。また、墓室前方には水平や垂直な溝が掘り込まれ、以前はそれらに材がはめ込まれ、柱や庇状の構造があったことを窺わせます。墓室前方には、削り出した岩盤や石積みで仕切られた2つの墓庭が広がりますが、その機能はよくわかっていません。墓庭の中央には参道も通ります。沖縄の(中～)近世墓にも、広い庭が備え付けられています。

周辺のチュラドゥール(2号墓)や 謎の3号墓…内城泉川古墓群

世之主の墓ほど近くには、大型石造り掘込墓が他に2基知られています。チュラドゥール(左)と3号墓(右)です。世之主の墓と同じように、墓室前方には墓庭が配置されています。チュラドゥールは現在も使用されている墓で、2つの墓庭と墓室上の奇棟造屋根が特徴的です。3号墓は世之主の墓に最も近い掘込墓ですが、その存在は忘れられ、ひっそりと森の中にたたずんでいます。周辺にはこの他、和泊町教育委員会の調査で大小7基の掘込墓が確認され、令和5年8月10日付で内城泉川古墓群として遺跡登録されました。



墓構造や出土遺物とはかけ離れる、 人骨の年代観…

和泊町教育委員会の調査により、世之主の墓の構造や出土遺物は、近世(江戸時代)の産物だとわかりました。一方、和泊町教育委員会が実施した墓室内人骨の放射線炭素年代測定の結果、13世紀後半～15世紀前半の中世(鎌倉・室町時代)の人骨が含まれることが判明しました。

新城花窪ニヤートウ墓

知名町

近世(江戸時代)に 沖永良部島の代官が造った墓

新城花窪ニヤートウ墓は、薩摩藩の城下士であった遠矢金兵衛が、代官として沖永良部島に赴任した際に、妻子のために建てた墓と伝えられています。代官としての在職期間は1804(文化元)年から1805(文化2)年で、1824(文政7)年に座横目として再び来島しています。また、墓室に残されていた蔵骨器の一部は、1877(明治10)年に上城字の墓へ移したとされています。



2つの墓庭と門をもつ、 めずらしい構造

新城花窪ニヤートウ墓は、墓室前方に2つの墓庭を配置します。その間に門を設け、内庭・外庭を区切ります。このような構造は、沖永良部島の中でも、新城花窪ニヤートウ墓・世之主の墓・チュラドゥールの3件だけにみられる特徴です。全体構造は世之主の墓と同じように、琉球石灰岩の岩盤を掘り込んで窪地を造り、最北の岩壁に横穴を掘り込んで墓室を設け、墓室前方に削り出した岩盤や石積みで囲った墓庭を配します。墓室上には、岩盤を削り出し成形した屋根構造が確認できます。

発掘調査で分かったこと!

発掘調査では、採集品として墓口の周辺から、骨を納める蔵骨器と、お供え物を入れたと考えられる供膳具が採集されました。蔵骨器は転用された薩摩苗代川(日置市)産の甕で、18世紀以降のものと考えられます。供膳具は、肥前(佐賀・長崎県)産磁器の碗と薩摩産の加治木・始良(始良市)系陶器碗のものがみつき、多様な種類・産地の陶磁器が出土しています。



屋者がジマル墓

知名町

世之主四天王の豪族、 屋者真三郎の伝説

やじや
屋者ガジマル墓には、15世紀初頭頃に沖永良部島を治めていたとされる永良部世之主の四天王の一人、屋者真三郎の墓とする伝承が残っています。地域では「屋者マサバルの墓」または「マサバルの墓」と呼ばれ、親しまれています。1850(嘉永3)年に記されたとされる『世乃主の御由緒書』では、屋者マサバルの骨は世之主の墓に安置されていると言われていました。また、真三郎という名前は琉球にみられないことから、日本からの落人であろうという伝承も残っていますが、いずれもはっきりとしたことはわかっていません。



まるで死者の宮殿!? 石葺きの切妻造屋根の墓

墓の構築には、琉球石灰岩を丁寧に加工し、積み上げていく石積み技法がみられます。特に墓室周辺はその意識が強く、整えた岩盤の上に、方形または多角形に加工された石材を積んで、全体構造を形造ります。屋根部分も同様に、加工した石材を敷き詰めて、建物的外観を表現しています。また、2枚の屋根面とてっぺんの棟、正面に張り出した軒きりつまづくりを設け、切妻造屋根や建物的外観を形造ります。それぞれの部位により、形状や大きさの違う石材を使い、技術の高さを窺わせます。石積み技法を主体として全般的に墓室の屋根・建物形を表現するのは、沖永良部島の中でも当該墓のみにもみられる特徴です。

発掘調査で分かったこと!

墓庭から、17世紀から18世紀にかけての外国産陶器を転用した蔵骨器、肥前・薩摩産の陶磁器や中国清朝磁器など、本土および海外系統の供膳具類が表採されています。これらの遺物は、他の墓と同様、祭祀行為や葬送儀礼に用いられた可能性が高いと考えられます。その他、流通貨幣である寛永通宝かんえいつうほう(新寛永しんかんえい)も確認されており、供献品のあり方を考えるうえでも注目される資料です。



アーニマガヤトゥール墓 知名町

墓にまつわる伝承 いろいろ!!

アーニマガヤトゥール墓は、民間伝承としてイチとナビグッ夫婦の哀話が残っています。妻のナビグッが病死し、当該墓に葬られた後に通いつめ、妻の霊と語り明かしたという話が伝わっています。その他に、豪族の墓であるという話や、遠方の集落に住んでいたものがこの場所に葬られたという伝承も残されています。



他では見られない!! 墓室正面のユニークな構造

アーニマガヤトゥール墓の造営は、琉球石灰岩を削ったり、平坦または曲線的に整えて調整したりする掘り込みの技術が主体となります。特に、墓室正面の造形は、岩盤を精緻に加工・整形して、社寺仏閣の意匠いしやうを模して造られています。更には、段を設け、外観が左右対称の構造になっています。また、墓室内には蔵骨器を設置するために、奥壁、右壁、左壁の3方向に同じ規格のタナを設けており、規格性の高い極めて精巧な造りが、掘り込みによって実現されていることがわかります。対して、外観の石積みは部分的にはみられませんが、現在残っているものは、聞き取り調査や測量調査の成果から、大半が後からの積み直しによるものとみられます。

発掘調査で分かったこと!

出土遺物は、南中国産褐釉陶器かつゆうや沖縄産瓦質陶器がしつなどの15世紀代から16世紀代のものと、肥前・薩摩・沖縄産の供膳具等の17世紀後半から19世紀代ものの2つの時代の陶磁器が確認されています。後者の時代の陶磁器が、町内の古墓から出土・確認されることが多いため、当該墓の造営年代と一致する可能性が高いと考えられます。また、奄美群島での出土例が少ない京都産の焼物「色絵」いろえがみつかり、これは有力者の墓に見られる傾向です。これらの陶磁器は、アーニマガヤトゥール墓の背景を考えるうえで重要な資料になります。

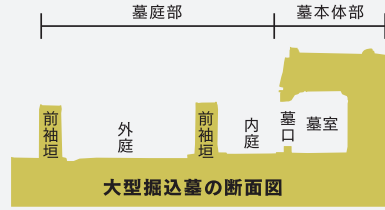


琉球王国の影響を受けていた沖永良部島に見られる、前庭を持つ大型石造り掘込墓

国指定史跡 沖永良部島古墓群

よのめしはか しんじょうはな くぼ ぼか やじゃ ぼか ぼか
世之主の墓 新城花窪ニヤートウ墓 屋者がジマル墓 ヲママガヤトゥール墓

Let's ふかぼり!!



奄美・沖縄地域では、先史時代から岩陰や洞窟が葬地として利用されてきました。時代が下るにつれ、次第に岩陰や洞窟を整形したり、墓の前面を整地したりする事例が見られるように、**琉球石灰岩が分布する地域**においては、**岩に横穴を掘り込み、墓室を形成**するものも見られるように。さらに、墓本体部前面に**庭構造を有するものが出現**します。墓庭の発掘調査では、人骨・焼物片・ガラス小玉などの出土が確認され、併せて民俗学の見地から、葬送儀礼が行われていたことが想定されます。

これらの特徴は、奄美・沖縄地域全体に共通する要素ですが、沖永良部島においては、世之主の墓など**大規模で墓本体部に屋根構造を持つものや、墓本体部正面に建物意匠を施した大型掘込墓**が築かれるようになります。喜界島のムヤ・徳之島のトゥール墓・与論島のジシと呼ばれる掘込墓などにも石積みで囲まれた庭を持つものが見られますが、**沖永良部島のものはより大規模**であり、**墓本体部の外観や墓本体部正面の意匠のバリエーションが豊富**です。

沖永良部島の大型掘込墓は、^{たまらじゅん}玉陵(国宝)など沖縄の建物意匠を意図した古墓と構造的共通性があり、**成立には沖縄の影響**があったと考えられます。世之主の墓は、琉球三山(北山・中山・南山)時代(14~15世紀前半頃)にこの島を治めていたとされる「永良部世之主」の墓と伝わり、また屋者がジマル墓も「永良部世之主」に関連した伝承を持ちます。「永良部世之主」は、伝説では北山王の次男とされます。沖永良部島の大型掘込墓の初現は不明ですが、これらは沖縄の玉陵や近世墓の影響を受け、**中世末期(1501年以降)~近世に成立し、島の有力者(支配者層)が築造**したと考えられます。

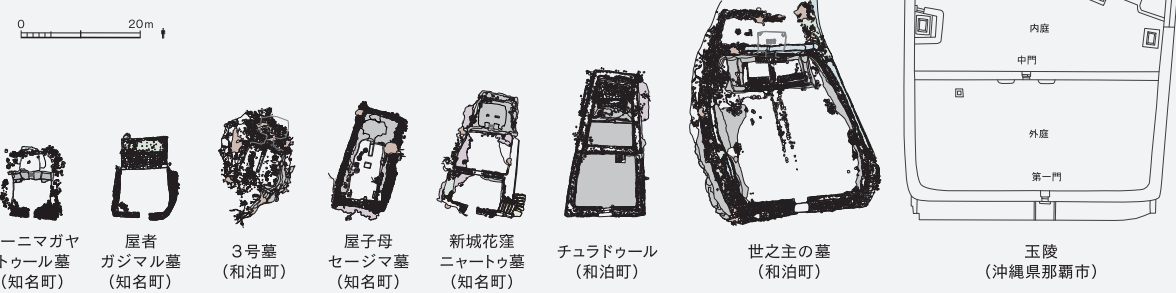
沖永良部島は、1429年に琉球王国に属しましたが、1609(慶長14)年からは薩摩藩の支配下に置かれました。沖永良部島の大型掘込墓は、**薩摩藩支配下でも築かれ使用され続けました**。また、蔵骨器に沖縄産^{すしがめ}厨子甕を用いるなど、**薩摩藩の規制は認められず、島の支配階級と薩摩藩との結びつきが想定**されます。

以上より、沖永良部島の大型掘込墓について、次のことが言えます。

- 1 奄美群島(沖永良部島)の伝統的墓制と玉陵などの沖縄からの影響が結びつき、早ければ16世紀初頭には成立した。
- 2 墓の変遷過程から、横並びの社会から階層のある縦社会へという沖永良部島の社会構造の変化を読み取ることができる。
- 3 沖永良部島古墓群成立以降、薩摩藩統治下以降も近世を通じて沖縄的な墓が築かれ、継続して使用されてきたということには、奄美大島と沖縄の中間に位置する沖永良部島が、奄美大島や徳之島と比較して薩摩藩の支配が緩かったという、地政学的特徴が反映されている。

このように、沖永良部島古墓群は、沖縄と九州の周辺に位置する奄美群島(沖永良部島)の中世から近世に至る歴史や文化について、墓の成立過程や伝統的葬送儀礼の継承を通して理解することのできる重要な史跡であることが明らかになりました。

「沖永良部島の大型掘込墓」と玉陵の大きさを比較してみよう!



琉球三山時代

中山

北山 南山

1416年 北山滅亡

1429年 中山琉球統一

1501年 「玉陵」創建

1609年 薩摩藩が琉球に侵攻

沖永良部島古墓群が造営・使用された時期

1872年 琉球藩設置

1877年 沖永良部島で風葬禁止令

1879年 沖縄県設置

1953年 奄美群島の日本復帰

2026年 2月17日 「沖永良部島古墓群」国の史跡に指定